Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University. 2010, Vol.12, 39-49.

論　文

集団保育に取り入れられたベビーサインに関する研究
―保護者・保育者への質問紙調査結果の報告―

赤津　純子・三浦　香苗

"Baby Signing" during group childcare

Junko AKATSU and Kanae MIURA

"Baby Signing" is a method of teaching simple, symbolic gestures to preverbal children and using them to communicate with the children.

This study aimed to identify what function Baby Signing serves in childcare by surveying workers at day care centers that use this communication method, and parents of children who attend such centers. The results of a survey of five care providers and 21 parents revealed that (1) the care providers were able to understand the children's demands more readily by having the children use Baby Signing and (2) began consciously using the gestures themselves to talk to the children in a more easy-to-understand manner, but that (3) some care providers felt it difficult to master Baby Signing. On the other hand, (1) many families began using the gestures that the children had learned at day care centers to communicate with their children, while (2) some families were unable to understand the children's gestures and could not respond successfully. These findings suggest that collaboration between parents, as well as between day care centers and families, is needed to allow Baby Signing to be used more smoothly and effectively.

*Key words : Baby Signing（ベビーサイン）, symbolic gestures（象徴的身振り）,
communication with infants（乳幼児との意思疎通）,
collaboration between childcare providers and parents（保育園の保育者と保護者との連携）*

問題と目的

まだ言葉を話すことのできない子どもの意思や感情が明確に理解できれば、おとなは子どもに対してより適切な対応ができるであろう。ベビーサインとは話し言葉を獲得していない子どもとおとなとがコミュニケーションを図る方法の一つである。これは自然発生的に出現する象徴的身振りとは異なり、おとなが子どもに意図的にベビーサインを教えることから始まる。ベビーサインの例をappendix 1に示す。

ベビーサインという発想は、自発的に象徴的身振りを使うようになった子どもに新たな身振りを教示し学習させ、その使用過程を分析したAcredolo & Goodwyn (1985) の研究からはじまる。この論文ではSymbolic gesturing（象徴的身振り）と記されているが、後にそのガイドブックの題名を「Baby Signs（ベビーサイン）」(Acredolo & Goodwyn，1996）としたところから、それが通称として使われるようになった。

ところで、ベビーサインとヒトの用いる手話と類人猿の研究で用いられる手話とはどのようなところが似ていて、どのようなところに違いがあるのであろうか。ヒトの手話は「音声言語と比較して、意味の全体を瞬時的に視覚的に表現できる、ゆるやかな法則にしたがっており任意な表現を作り出せるなどの特徴がある。」(佐々木，1995）というように、単に、単語としてだけではなく、意味全体を表現できる文章の機能をも果たしている。

類人猿の手話言語に関する研究（Gardner, 1969; Terrace, 1979 中野訳，1986; Patterson & Linden, 1981 津守訳，1984等）では、各研究者の環境の設定に違いがあるため、そこで使われるようになった手話をどれもが同一のものであると

は見なすことはできないが、最も環境が統制されていると考えられる Gardner（1969）では、チンパンジーのワシューの前ではヒトの音声言語は全く使われず、手話のみが使用されていた。この点では少なくとも、彼らの手話は聴覚障害者の用いる手話と同様の機能を果たしていたと考えられる。ただ、聴覚障害者と異なり、ワシューの耳の機能は健常であったので、その他に叫び、笑い、歓喜の発声でも意思疎通をはかることができた（Fouts, 1997　高橋他訳，2000）。

一方、ベビーサインは音声言語と共に用いられる。子どもに対してはヒトに用いられる手話と同じような手話単語を教える。その時には同時に音声言語も発せられる。聴覚障害者には音声言語を発しても本人には聞こえない場合が多いが、子どもには視覚的にサインが、聴覚的に音声言語が一緒に提示されることになり、２つの情報を同時に得ることができる。

ベビーサインは個々の家庭で母親が育児をする時に子どもとのコミュニケーションを図る手段の一つとして利用され、ベビーサインの使い方を教示する教室が普及したことや、様々なベビーサインの実践本が販売されたこと等によりアメリカでは一般に広がっていった。

また、日本には、ベビーサインを知ったアメリカ在住の日本人の母親が帰国後、その方法を流布するなどして広まり、現在ではいくつかの団体が作られている。初期には書籍に出ているアメリカ手話（American Sign Language：以下 ASL と略す）をそのまま使用していたが、徐々に日本手話の使用や、子どもの発達を考慮しより単純化した独自のサインなどの考案もされるようになってきた。このベビーサインはまず、子どもに教える前に、ベビーサインを教える教室に通ったり、ベビーサインの啓蒙書を読んだりして養育者自らがそれを習得する必要がある。

日本のベビーサインについては、「手話準拠型」と「自由創造型」の２つの流れがあることが指摘されている。（吉中，2002）「手話準拠型」とは公に使われている ASL や日本手話を用いるものであり、中には子どもの発達を考慮して簡略化した手話も含まれる。一方「自由創造型」とは子どもが自発的に作り出したり、おとなの動作を模倣したり、おとなと子どもとのやり取りの中でできてきたオリジナルのものである。家庭の中では「手話準拠型」と「自由創造型」を織り交ぜて使用する場合もあるが、集団保育の場ではみんなが共通して理解できるように「手話準拠型」のみを用いている場合が多いと考えられる。また手話をより単純化し、日本の乳児が使いやすいようにグーとパーという手の開閉だけを用いるサインも考案されている。（近藤，2004）

ベビーサインは言葉を話す以前の子どもとおとなとが意思疎通を図る方法として国内では急速に多くの家庭に普及してきたものであるにもかかわらず、現在まで、子どもにとっての発達的意味、保護者にとっての精神的意味についての研究は皆無である。また、最近では家庭だけではなく、集団保育の場にもこのベビーサインが導入されるようになってきた。ベビーサインを用いている保育園で実際に保育を行っている保育者やその園に通園している子どもの保護者にとって、このベビーサインはどのように意識されているかということを把握しておくことはベビーサインの役割を検討する上で必要である。そこで本研究は、ベビーサインを保育の中に取り入れている保育園に通っている子どもの保護者、保育者を対象に質問紙調査を行ない、ベビーサインについての認識、実際に使用している上で良かった点や気がかりな点、工夫等について検討することにより、ベビーサインが集団保育という環境の中でどのような機能を果たしているのかについて考察し、さらにベビーサインの子どもの発達の中での位置づけについての示唆を得ることを目的とする。

調査１

目的

子どもたちにベビーサインを教えている保育者自身はベビーサインを保育の中に取り入れていることをどのように思っているか、及び実際に保育者はどのようなベビーサインを多く使っているのかということについて、（１）子どもにとっての効果、（２）自身の保育活動にとっての効果、（３）工夫・改善についての意見、（４）保育の中で観察された印象に残る事柄、（５）保育者自身が習得したベビーサインのうち、実際の保育の中で使用しているサインの使用頻度の５つの側面から質問紙を用いて調査する。

方法

１　調査対象者

実際にベビーサインを用いて保育を行っている千葉県内の保育園１園で調査を行った。ここでは言葉を話すようになる前の子どもたちが在籍する０歳児、１歳児クラスでベビーサインを使った保育を行っている。担当する保育者のうち、常勤の保育者は全員（６名：０歳児クラス２名・１歳児クラス４名）が日本ベビーサイン協会の講師認定試験に合格している（非常勤の保育者は特にベビーサインを習得しているわけではない。）。この常勤保育者６名を対象とした。

２　実施時期及び手続き

2008年３月上旬に、ベビーサインを取り入れた保育を行っている０歳児クラスと１歳児クラスを担当する常勤の保育者６名に、得られた資料は研究以外に使用しないことを伝えた上で質問紙を配布し、１週間後に回収した。０歳児クラス担当の１名以外の５名から回答があった。

３　質問紙の内容

（１）　子どもにとっての効果

①　ベビーサインを保育の中に取り入れることは子どもたちにとって良かったと思うか、について、良かった・わからない・その他、の３つの中からあてはまるものを選択する。

②　ベビーサインを取り入れた保育を行ったことで子どもたちにとって良かった点について自由記述を求めた。

（２）　保育者自身の保育活動にとっての効果

①　ベビーサインを保育の中に取り入れることは保育者自身の保育活動にとって役立ったか否か、について、役立っている・どちらかといえば役立っている・役立っていない・その他、の４つの中からあてはまるものを選択する。

②　保育者自身の保育活動にとって良かった点、コミュニケーションを取る上で役立った点について自由記述を求めた。

（３）　工夫・改善についての意見

ベビーサインの使い方について工夫が必要だと感じられる点、気がかりな点について自由記述を求めた。

（４）　保育の中で観察された印象に残る事柄

ベビーサインにまつわるエピソードについて自由記述を求めた。

（５）　保育者自身の習得しているベビーサインの保育中の使用頻度

日本ベビーサイン協会の講習会で習得したベビーサイン130個の各々について、１よく使う、２時々使う、３あまり使わない、４全然使わない、の４つの中からあてはまるものを選択する

結果・考察

（１）　子どもにとっての効果

①　ベビーサインを取り入れた保育を行ったことで子どもたちにとって良かったと思うか、については５名全員が良かったと回答している。

②　５名全員が子ども自身の意思を伝えられることを述べている。また子どもは精神的に満足を得られることに触れている者もいる（ア）（Table 1）

（２）　保育者自身の保育活動にとっての効果

①　ベビーサインを保育の中に取り入れたことが保育者自身にとって役立ったか否かについては、５名全員が役立っていると回答している。

②　５名全員がベビーサインを保育の中に取り入れることにより意思疎通が図れるようになったこと、子どもの要求がわかりやすくなったことのいずれかを記述している。その他には、言葉ではなく、子どもの理解できるサインという身振りを通して子どもに接したことで、保育の効果が上がったことを記述している者（ス）と、保育者自身が子どもの理解を助けるために言葉だけでなく、身振りをよく使うようになったことを挙げている者（セ）がみられた。（Table 1）

（３）　工夫・改善についての意見

工夫が必要だと感じられる点、気がかりな点については、６つの意見が挙がった。ア、イ、ウは工夫が必要な点である。アは、保育園は幼稚園と異なり、時間により保育担当者が入れ替わるので、新しく獲得させたい、または集中的に教えたいと思うサインについて担当者間で打ち合わせが必要であるということ、イは非常勤の保育者はベビーサインを習得していないため、子どもがベビーサインを使った時やベビーサインを用いた方がよりよい場面で、より適切な応答、対応ができない場合があるという指摘、ウは何度も繰り返し見せることが、サインをしっかりと定着させ

Table 1　子どもにとっての効果・保育者自身の保育活動にとっての効果（自由記述）

【子どもにとっての効果】
子ども自身の意思が伝えられること
ア　ことばが話せない時期から保育者とコミュニケーションが取れ、気持ちや要求が通じる事により満足感が得られたと思う。
イ　子どもの意思がわかる。
ウ　自分の要求をみんなに伝えられていると思う。
エ　言葉が出なくても意思が伝わる。
オ　やってほしいことや思っていることがわかってもらえる。
【保育者自身の保育活動にとっての効果】
意思疎通が図れること
カ　子どもとのコミュニケーションが深まった。
キ　子どもとサインを通して会話することができ、お互いの気持ちをわかりあうことができた。
ク　サインを使って意思疎通ができた。
ケ　ベビーサインで会話ができた。
子どもの要求が理解できること
コ　“やって”“ちょうだい”など何か要求があると手を動かして保育者に思いを伝えようとしたことがあったので、見ていてわかりやすい。
サ　子どもの意思がわかり、何を手伝ってあげたらよいかが理解できる。
シ　子どもの要求が目で見てわかる。
保育の効果
ス　次の活動をサインで伝えることにより、次への動きがスムーズに行えた。言葉では伝えられない事柄をサインで伝えられた。
保育者自身の変化
セ　自分自身が保育の中で意識して手指を使うようになってよかった。

Table 2　工夫・改善についての意見（自由記述）

【工夫が必要な点】
ア　クラスの保育者間で使うサインを決めておくこと。
イ　保育者全員がサインを使えること。
ウ　何度も繰り返し見せること。
【実行した工夫】
エ　工夫した点として、多くの種類のベビーサインを教えるのにはCDや絵本を用いた。
【ベビーサインについての感想】
オ　サインの数が多く保育者自身が覚えるのに少し時間が掛かる。子どもの変形サインを見抜くのが難しい。
カ　言葉が出るようになってくるとサインが減ってくる。せっかく覚えたのに全くなくなるのは仕方ないが寂しい。

Table 3　保育中に観察された印象に残る事柄（自由記述）

【エピソード】
ア　あまり言葉が出なかった女児（１歳７ヶ月）が他児とベビーサインでやり取りをしていた。“おやつ”“食べる”とサインを組み合わせて使っていたことにも驚いた。
イ　オムツの引き出しを上手に開けることができず困っていた子どもがそっと近づいてきて“やって”と頼んでいた。
ウ　保育者がくすぐると、“もっと”とサインをして喜んでいた。
エ　保護者も、家庭で子どもが園で覚えたサインを使い『おもしろい』『言いたいことが分かる』と言ってきてくれたことが多かった。

ることになるということである。

エは日常生活のやり取りだけでは使用するサインに限界があるので、CDや絵本を活用したということ、オは保育者自身にとって記憶の負担となること、子どもがせっかくサインを出しても、変形している場合には自分が理解しにくく、適切な応答ができないという指摘である。カからは、子どもが成長するにつれて話し言葉を発するようになるとサインが自然に減ってくるので保育者としても使う頻度が減ってくることが分かる。(Table 2)

（４）　保育の中で観察された印象に残る事柄

ベビーサインにまつわるエピソードとして、アからは日常生活の中で保育者と子ども間だけではなく子ども同士でもベビーサインが使われていること、サインを組み合わせて文を作っていることがわかる。イ、ウからは子どもたちが生活の中でサインを使っていること、エからは家庭でも用いられており、保護者にも好評であることがわかる（Table 3）。

Table 4　保育者の習得しているベビーサイン（130個）の保育中の使用頻度

内容＼使用頻度	よく使う	時々使う	あまり使わない	全然使わない
要求・指示	もっと　待って　貸して 助けて　やって　静かに ちょうだい　トイレだよ	やめて	ダメ	やさしくして 一緒に使いましょう
挨拶	バイバイ　おしまい いただきます　どうぞ ごちそうさまでした	おやすみ	ごめんなさい ありがとう	
質問	どこ？			
形容・修飾	おいしい	痛い	寒い［冷たい］ 危ない	熱い　大事（大切）　汚い　大きい きれい　小さい　暑い
動作		食べる	オムツ換えるよ 片付ける	外へ　中へ　並ぶ　座る　立つ 分ける　泳ぐ
乗り物	飛行機	自動車　消防車　救急車 パトカー　電車　バス ヘリコプター	新幹線　船　トラック	ショベルカー
食物	おやつ　ミルク バナナ　リンゴ	パン　イチゴ　マンマ ブドウ	ニンジン　豆	お茶　パスタ　ケーキ　キュウリ うどん　スイカ　卵　ヨーグルト桃 コーン　カボチャ　栗　サツマイモ
動物		豚　猫　ウサギ　キリン 犬　鳥　魚　馬　象　猿 ネズミ　ペンギン カエル　ライオン	ゴリラ	イルカ　コウモリ トナカイ　クジラ
昆虫		チョウチョ	青虫	テントウムシ　カタツムリ　セミ カブトムシ　クワガタ　カマキリ トンボ
植物		花		葉っぱ
衣類	帽子　靴			
用品	薬		傘	カバン
玩具	ボール			人形
遊具			砂場（砂）	滑り台　ブランコ
架空のもの			鬼	魔女　サンタクロース
気象関係				星　雪　雷　雲　雪だるま
行事			豆まき	クリスマスツリー　花火
父母				お父さん　お母さん
合計	24	31	18	57

（5）　保育者自身の習得しているベビーサインの保育中の使用頻度

保育者自身が習得した130個のベビーサインのうち、実際に保育者が使用している頻度の評価を求めた。保育者が習得した全ベビーサイン（130個）の保育場面での使用頻度について保育者が４段階評定（１よく使う２時々使う３あまり使わない４全然使わない）を行なった。そこから各ベビーサインの５名の使用頻度の平均値を算出し、小椋（1999）の語彙の種類の分類を参考に範疇化した。さらに、平均値をよく使う（５名の平均：1.00～1.75）・時々使う（平均：1.75～2.50）あまり使わない（平均：2.50～3.25）・全然使わない（平均：3.25～4.00）の４段階に分け、表にまとめたものがTable 4である。

保育者が保育中に使用するベビーサインの頻度については、よく用いられるものは、要

求・指示、挨拶などの保育園での生活の中でも、養護面に関連したもので、続いて時々使うものは、身近な動物、乗り物など教育面に関連したものが多い。事柄の形容、動作に関するもの、昆虫、季節の行事、気象、架空のものなど特殊な場面に関するベビーサインはほとんど使用されない。また、お父さん、お母さんも使われていない（ここからは保育場面では父母のことが話題に上らないことがうかがえる)。食物については、給食によく出される果物（バナナ・リンゴなど）や主食（パン・マンマ）は使われているが、それ以外はほとんど使用されていない。

まとめ

（1） 保育者は、子どもはベビーサインを用いることにより相手との意思疎通ができ、またそれにより子どもは精神的な安定を得ていると捉えている。

（2） 保育者自身にとっての効果については、言葉をしゃべれない子どもの要求がわかりやすくなり、さらに自身も保育の中で身振りをよく使うようになったことが挙げられている。

（3） 工夫、改善が必要な点としては、繰り返し同じサインを見せること、保育者全員がサインを使えること、保育者間の使用サインについての打ち合わせを密にしておくこと、定着させるためには何回も実演して見せたり、CD、絵本を活用したりすること等が必要であること、また、子どもの変形サインを見抜くのが困難であること、保育者自身が覚えることが負担であったことが指摘されている。

（4） 印象に残った事柄としては、保育者と子ども間だけではなく、子ども同士でもサインを使い、さらに２つのサインを組み合わせて文を作る子どもがいたこと、家でも使用し、保護者にも好評であることが挙げられている。

（5） 保育者自身のベビーサインの使用頻度の分析からは、よく使うサインは生活に密着したもので、季節の行事、気象など特別な場面に関するものはほとんど使われていないことがわかる。

調査２

目的

保育にベビーサインを取り入れている保育園に通園させている保護者の、ベビーサインについての意識、考え、家庭の中でのベビーサインの使われ方について（１）ベビーサインを取り入れた保育への期待（２）家での使用の有無（３）子ども・保護者にとっての効果（４）家庭で見られるベビーサインや自発的な象徴的身振りの使用（５）家庭の中で観察された印象に残る事柄の５つの側面から調査する。

方法

１．調査対象者

同園に在籍する０・１歳児クラスの園児の保護者26名を対象とした。

２．調査時期及び手続き

2008年１月中旬に各クラスの担任を通して質問紙を配布してもらい、２週間後に回収した。保護者21名（年齢は０歳７カ月から２歳９カ月、性別は男児15名・女児６名の保護者）から回答があった。

３．質問紙の内容

質問紙には研究以外の目的には使用しないことを明記した。無記名で、子どもの年齢、性別についての問いの後に下記の内容についての項目を載せた。

（1） ベビーサインを取り入れた保育への期待

ベビーサインを取り入れた保育を実践している園であることを知っていたか否かについて尋ねる。

入園前から知っていた・入園後知った・知らなかった、の３つの中からあてはまるものを選択する。

（2） ベビーサインの家での使用の有無

ベビーサインを家で使っている・使っていない・わからない・その他、の４つの中からあてはまるものを選択する。

（3） 子どもにとっての効果・保護者にとっての効果

①－１　家で使っている場合子どもにとって良かったと思うか否か

良かった・わからない・その他、の３つの中からあてはまるものを選択する。

①－２　家で使うベビーサインに関して自由記述を求めた。

②　親子のコミュニケーションを図る上で役立っているか否か

役立っている・どちらかというと役立っている・役立っていない・その他、の４つの中

からあてはまるものを選択する。

（４） 子どもの示すベビーサインと子どもの自発的な象徴的身振りの使用

ベビーサインとベビーサイン以外の子どもがよく使う手振り身振りについて自由記述を求めた。

（５） 家の中で観察された印象に残る事柄

ベビーサインにまつわるエピソードについて自由記述を求めた。

結果・考察

（１） ベビーサインを取り入れた保育への期待

ベビーサインを入園してから知った者が多い。入園時には保護者のベビーサインを習得することに対する動機づけは高くない(Table 5)。

（２） ベビーサインの家での使用の有無

ベビーサインを家で使用していると回答した者は男児13名、女児５名、使用していないと回答した者は男児女児各１名、家で使用しているかどうかはわからないと答えたものは男児１名である。

（３） 子どもにとっての効果・保護者にとっての効果

①－１ 家で使っている場合、子どもにとってよかったと思うか否か

ベビーサインを家で使用している子どもの保護者の多くはベビーサインを保育園で習ったことは良かったと感じている。(Table 6)

①－２ 家で使うベビーサインについての自由記述

ベビーサインを習ったことで、保護者自身は子どもの考えが理解できて適切に対応できうれしいという意見が多い。子どもにとっても意思が伝えられる、子ども同士の意思疎通にも役立つ、というように効果があるとの意見が大半ではあるが、中には、サインの意味がわからないという言及もみられる（ク）。(Appendix 2)

② 親子のコミュニケーションを図る上で役立っているか否か

ベビーサインは親子のコミュニケーションを図る上で役立っているか否かについては、

Table 5　家で使用の有無と保育所がベビーサインを導入していることを入園以前から承知していたか否か

家での使用の有無 ＼ 保育所でベビーサインを使っていることを知っていたか否か		保育園でベビーサインを使っていることを知っていた：入園前から知っていた	保育園でベビーサインを使っていることを知っていた：入園してから知った	合計
家で使用	使用	4	14	18
	不使用	0	2	2
	わからない	0	1	1
合計		4	17	21

Table 6　家での使用の有無と学習したことベビーはよかったか・サインは役立っているか

家での使用の有無 ＼ 感想		習ったことは良かった：良かった	習ったことは良かった：わからない	サインは 役立つ：役立っている	サインは 役立つ：どちらかというと役立っている	サインは 役立つ：役立っていない	サインは 役立つ：その他	合計
家で使用	使用	15	3	12	3	1	2	18
	不使用	0	2	0	1	0	1	2
	わからない	0	1	0	0	1	0	1
合計		15	6	12	4	2	3	21

$\chi^2=8.750^a$ $df=2$ $P=0.013$　　$\chi^2=14.389^a$ $df=6$ $P=0.026$

役立っていると感じている者が多い（Table 6)。

（４）　子どもの示すベビーサインと自発的な象徴的身振りの使用

家で見られるベビーサインには、保育者が保育中に使うベビーサイン（Table 4）の中の使用頻度が高いものが多い（「ダメ」以外はすべて保育者が“よく使う”“時々使う”の項に分類されているサインである―保育園では家庭に比べダメと否定する場面は少ないことがうかがえる)。また家庭では保育園で使用されているものばかりではなく、各家庭のオリジナルの象徴的身振りが見られる。(Appendix 3)

（５）　家の中で観察された印象に残る事柄

親子が楽しみながらベビーサインを使って意思伝達をしている様子がうかがえる一方で、多くのサインを子どもが示しているのに保護者がそれを理解できず応答できないとの言及もある（ク・ケ・コ)。(Appendix 4)。

まとめ

（１）　この保育園に在籍している子どもの保育者の多くは、入園時にはベビーサインを習うことについての意識は高くない。

（２）　21名中18名が家でベビーサインを使っていると報告している。

（３）　多くの保護者は子どもが意思を表現できる、保護者自身も子どもの気持ちを理解できる、子ども同士の意思疎通も図られているようだと子どもにとっての効果・保護者にとっての効果があることを述べているが、一方でサインの意味がわからず、応答的な対応ができなかったという回答もある。

（４）　家で使われるベビーサインは保育者が保育中によく使用する、時々使用するベビーサインとほぼ一致している。また家庭ではベビーサインばかりではなく、自発的な象徴的身振りも見られる。

全体的考察と今後の課題

ベビーサインが集団保育の中で果たす機能と子どもの発達の中での位置づけについて考える。

集団保育の中でベビーサインを取り入れることは保育者にとっても、保護者にとっても概ね効果があると受け止められている。保育者にとっては子どもの意思をよりはっきりと理解できるだけではなく、自分自身も子どものレベルに合わせた指導法を工夫しようと努力すること等の効果が表れている。保護者については、多くの者が子どもと意思伝達ができることに喜びを感じている。しかしながら、保育者については、子どもが変形のベビーサインを示す場合に、保護者についてはそれに加え、サインを保護者が知らない場合に子どもに適切に応答してあげられず子どもとの意思疎通ができないこととなる。

子どもたちのベビーサインの使い方の変化の過程をみると、保育者による観察からは、おとなと子ども間だけでなく、子どもたちの間でも、言葉が話せない時期からお互いに意思疎通する手段として用い、さらに２つのベビーサインを組み合わせた文を作る者もいることがわかる。そして言葉を話せるようになると子どもたちのベビーサインを使う頻度は徐々に減ってくることとなる。

１　集団保育という環境について　集団保育の場では共通のベビーサイン（手話準拠型）を用いることになる。集団保育では個々の子どもとのやり取りの中でサインが変形しては共通理解ができなくなってしまう。保育者からの意見では、保育者間でその時期に教えるサインを決めておくこと、常勤だけではなく非常勤の保育者も含め全員がサインを習得していることという保育者間での足並みをそろえることの必要性が述べられている。一方家庭の中では養育者と子どもとの間でサインを改良、変形していくことは可能である。

家庭児と乳児院の乳児の象徴的身振りの出現頻度を研究した内田・秦野（1978）では、Ａ人手の少ない乳児院（保育者１乳児８)、Ｂ人手の多い乳児院（保育者１乳児３)、Ｃ家庭児（長子、母１：乳児１）各２名の１日５時間あたりの象徴的身振りの出現頻度を比較し、Ｂの出現頻度が最も高く、Ａ、Ｃは出現頻度が低いという結果を得ている。これについて内田（1999）は家庭児の母親は子どもの要求に敏感に応じるため子ども自身が身振りを必要とする場面が少ない、一方人手の少ない乳児院では身振りをしても見逃されてしまうため子ども自身の使用する頻度が減少してしまう。人出の多い乳児院では乳児の身振りを使った反応に保育者が応答してあげるため、子どもも頻繁に使って要求を表すようになると解釈している。

調査対象の保育園では、意識的にベビーサイン

を提示してより注意深く子どものしぐさをみる習慣ができており、子どもたちはベビーサインを自主的に使いやすい環境となっているといえる。

帰宅してからもベビーサインを使っている子どもは多くおり、それに対して大半の保護者は応答的に対応している。しかし保護者が知らない、またはわかりにくいサインを子どもが使った時にはお互いの意思疎通は困難となる。したがって集団保育にベビーサインを取り入れる場合には、園から配布されるお便りや掲示、あるいは口頭で伝えるなど、ベビーサインの内容について少しでも保護者に理解してもらうための工夫や園と保護者間の連携が必要である。

２　子どもの発達の中でのベビーサインの位置づけ　言葉が話せるようになる前の子どもの自然発生的な象徴的身振りについては、次のような発達過程が想定されている。機能のはっきりしない原初的な身振りが現れてから１，２ヵ月後に身体の一部を伸ばしてある方向を指し示す直示的身振りと、身体の動きそのものが別のものを表現する象徴的身振りが出現する。この象徴的身振りは生後10カ月ごろから現れ、これは話し言葉の出現時期とほぼ一致している（小林・佐々木1997）。また身振りは、最初は環境とのかかわりで出現してくるが、この身振りに対して身近なおとなが応答してくれるという経験が介在してはじめて伝達の道具として機能し始める（内田1999）。

一方、ベビーサインは子どもの自発的な活動ではなく、いきなり、おとなから与えられるものである。そこでは自然発生的な身振りのように、段階を踏んだ能動的な過程が省略されている。このことの発達的な意味については詳細な検討が必要である。保育園の中ではベビーサインを用いているが、保護者からは家庭では自発的な象徴的身振りも使われていることが報告されている。おそらく保育園の中でも自発的な象徴的身振りも発現していると考えられる。

また、保育者の回答の中には、サインを覚えることの負担について言及している者がいたが、子どもにとっての学習の負荷についても考慮する必要がある。

３　今後の課題　自発的な象徴的身振りの発達過程のように、子どもがじっくりと自分で環境に働きかける方法を考える姿勢は、ベビーサインを与えてしまうということで摘み取られてしまう可能性はあるが、子どもを養育する立場の者たちは、ベビーサインという伝達方法に着目することにより、より応答的に子どもに対することができるようになる。このベビーサインをきっかけに自発的な象徴的身振りを含むこの時期の子どものさまざまな反応・活動に対し、または子どもそのものに対し、養育者の意識が向けられることが期待される。

今後、この園の中で子ども自身が使用するベビーサインの様相について分析する予定である。また、家庭児のベビーサインやベビーサインの習得過程と子どもの自発的な象徴的身振りの習得過程との違いについて検討していきたいと考える。

引用・参考文献

- Acredolo, L.P & Goodwyn, S.W. (1985) Symbolic gesturing in language development: A case study. *Human development* **28** 40-49
- Acredolo, L. P. & Goodwyn, S. W. (1996) *Baby Signs: How to Talk with Your Baby Before Baby Can Talk* The Miller Agency, Inc.（リンダ・アクレドロ、スーザン・グッドウィン著　たきざわあき訳（2001）ベビーサイン　まだ話せない赤ちゃんと話す方法　径書房）
- Fouts, R & Mills, S. T. (1997) *Next of KinWhat Chimpanzees Have Taught Me About Who We Are Lichtman*, Trister, Singer & Ross（ロジャー・ファウツ他　高崎浩幸他訳（2000）限りなく人類に近い類人が教えてくれたこと　角川書店）
- Garcia, J. (1999) *Sign with Your Baby: How to Communicate with infant before they can speak* Northlight Communications, Inc.
- Gardner, R. A. & Gardner B. T. (1969) Teaching Sign Language to a Chimpanzee. *Science*, **165**, 664-672.
- 小林晴美・佐々木正人（1997）子どもたちの言語獲得　大修館書店
- 近藤裕子（2004）ベビーサイン―グーとパーだけで赤ちゃんと会話　毎日新聞社
- Linden, E. (1986) *Silent partners: The Legacy of the Ape Language Experiments* Russell & volkening Inc, New York（リンデン　岡野恒也他訳（1988）悲劇のチンパンジー　どうぶつ社）

- ロング朋子（2003）ベイビーサインで赤ちゃんと話そう！　日本文芸社
- 松沢哲郎（2000）チンパンジーの心　岩波現代文庫
- 松沢哲郎（1991）チンパンジーから見た世界―認知科学選書23　東京大学出版会
- 直江千恵子（2003）世界一やさしいベビーサインの教え方　ブックマン社
- NPO 手話技能検定協会監修（2002）ひと目でわかる実用手話辞典　新星出版社
- 小田亮（1999）サルのことば　京都大学学術出版会
- 小椋たみ子（1999）語彙獲得の日米比較　桐谷滋（編）　ことばの獲得　ミネルヴァ書房　pp143-194
- 大杉豊編（2002）国際手話のハンドブック　三省堂
- Patterson, F. & Linden, E. (1981) *The Education of Koko* Russell & Volkening Inc.（フランシーヌ・パターソン他　津守淳夫訳（1984）ココ、お話ししよう　どうぶつ社）
- 酒井邦嘉（2002）言語の脳科学―脳はどのようにことばを生みだすか　中央公論新書
- 佐々木正人（1995）手話　発達心理学辞典　ミネルヴァ書房　p315
- 谷千春（2007）コンパクト手話辞典　池田書店
- Terrace, H. S. (1979) *NIM* Alfred A. Knopf, Inc., New York（ハーバード・S・テラス　中野尚彦訳（1986）ニム―手話で語るチンパンジー　思索社）
- 内田伸子、秦野悦子（1978）初期言語行動の成立過程　教育心理学会第20回総会発表論文集　314-315
- 内田伸子（1999）発達心理学―ことばの獲得と教育―　岩波書店
- 吉中みちる・まさくに（2002）赤ちゃんとお手てで話そう（書籍）　実業之日本社
- 吉中みちる・まさくに（2004）ベビーサインで楽しく遊ぼう　実業之日本社

Appendix 1　ベビーサインの例

いただきます（ごちそうさま）：両手を胸の前で合わせ、軽く会釈する（日本の手話では「いただきます」は「食べる＋祈る」で表す。具体的には　左の手のひら（ご飯を表す）の上で右手の人差指と中指を伸ばし（箸を表す）口に持っていく動作をした後、両手を胸の前で合わせる。「ごちそうさま」は「おいしい＋ありがとう」で表す。具体的には右手の五指を伸ばしてその手のひらを右頬に当てた後、手のひらを下に向けた左手の甲を右手の手刀で軽く叩く。）

おしまい：上に向けた両手のひらを内側に反して下に向ける（アメリカ手話（ASL）と同一）（日本の手話では肩の上あたりで上向きに開いた両手をすぼめながら下に下ろす。）

バナナ：人差し指を立てバナナを表し、もう片方の手で皮をむく動作をする（ASL と同一）（日本の手話では左手の 5 本の指をすぼめてバナナを形どり、右手でバナナの皮をむくように上から下へと動かす。）

Appendix 2　ベビーサインを習ったことは子どもにとって良かったか

《主な意見》

【親子の意思疎通ができたこと】

ア　1 歳ごろは大人の言うことは分かるようだが、子どもから話すのはまだ不十分なので、ベビーサインで伝えたいことが親に伝わって良かった。

イ　何をしてほしいのかがわかるので、子どもの欲求に対応できる。

ウ　コミュニケーションが増えた。

エ　コミュニケーションが取れお互い分かると笑顔になる、自分も楽しいし、子どもも嬉しそうだ。

オ　お話ができない時でもサインでわかることが嬉しかった。

カ　言葉が出るのが遅かったので自分の意思を伝えられる手段があって良かった。

【子ども同士の意思疎通ができたこと】

キ　親だけでなく子ども同士のコミュニケーションに役立ったと思う。

【親がベビーサインを知らないこと】

ク　親がベビーサインを知らないので何のサインか気づかない（ので良かったかどうかはわからない）。意味がわからないことが多かった。

Appendix 3　家で使うベビーサインと自発的な象徴的身振り

【家で使うベビーサイン】
要求・指示（もっともっと・やめて・ちょうだい・やって・ダメ・トイレ）**挨拶**（おしまい・バイバイ）**質問**（どこ？）**形容・修飾**（おいしい・痛い）**乗り物**（自動車・ヘリコプター・電車）**食物**（おやつ・ミルク・りんご・バナナ）**動物**（ネズミ・ウサギ・キリン・ゾウ）**衣類**（帽子・靴）**用品**（薬）
【子どもが良く使う自発的な象徴的身振り】
要求・指示（いや・だめ（顔を激しく左右に振る・手を振る）・抱っこ（両手を挙げて近寄ってくる）・待って（両手でパーをする）・お風呂）**挨拶**（だいすき（抱きつく）・どうも（頭を少し下げる）・いい子いい子（頭を撫でる）・ありがとう（お辞儀をする）・ごめんなさい（何度も首を縦に振る）・はい（返事して手を上げる））**形容・修飾**（いいお顔・上手上手（手をたたく）・大きい（手を大きく広げる））**模倣**（あっぷっぷ（指を頬に当てる）・ウルトラマンのポーズ・犬のおしっこのまね（姉が体育遊びで覚えた体操遊びのまねがそう見える）・園で並んで歩く時の動作（手を後ろに組む）・芸人の模倣）**状況**（尿・便が出た（股をポンポン叩く・股を指さす）・便や屁が出た（鼻をつまむ））**その他**（自分のことを指差しする）

Appendix 4　ベビーサインにまつわるエピソード

【ベビーサインの出現場面】
（食事・おやつ）
ア　食事をしている時「もっと」なのか「ごちそうさま」なのかわからない時に教えてくれたりする。
イ　バナナが大好きで、「おしまい」と言ったら泣きながら激しく「もっと」のベビーサインを使ってアピールした。
ウ　ご飯が足りない時「もっともっと」のサインをして母におかわりを伝えた。
エ　「おかし」をねだられ、あげたら「もっと」をされ、またあげてしまった、そうしたらずうっと「もっと」をされてしまい、仕草がかわいいのでついまたあげてしまった、最後に「おしまい」をやったら泣かれてしまった。
（遊び）
オ　ボールペンを顎の下に挟んで人指し指で「どこどこ？」と聞いて来て「あったー」と遊んでいる。
カ　ハンドクリームを手に塗っている時薬のベビーサインをしてくれた。
【わかりにくいサイン】
キ　薬と一本橋コチョコチョの手遊びのサインが同じなので今でも紛らわしい。
【親がサインを知らないこと】
ク　園でベビーサインを教えてもらい、手のひらを人指し指でグリグリ（薬のサイン）したが、何をいじけているのかと思い先生に話したところベビーサインだと聞き納得した。薬好きの我が子は薬の要求をしていたのだが、ある意味母に通じていない事にいじけていたのかもしれない。
ケ　子どもがサインをやっているのに親が気付かず一人でいつまでもやっていることがある。
コ　沢山サインをしていたようだが認識できなかった。
【ベビーサインと話し言葉の関係】
サ　最初はベビーサインばかりして言葉で言わなかったのでこのままサインだけだったらこまると思っていたが、時期がくると言葉も普通に出てきた。

付　記

本研究の一部は、日本教育心理学会第50回総会（2008）において発表された。

謝　辞

調査にご協力いただきました保育園の先生方、保護者の方々に深く感謝申し上げます。

（あかつ　じゅんこ　昭和女子大学生活機構研究科）
（みうら　かなえ　昭和女子大学心理学科）